

武蔵野日曜聖書講筈

地の塩・世の光

—マタイ伝第5章13～16節—

1993年5月23日

小池辰雄

救う義 義をたまわる 聖意体現 その中に自分が入る 世の光 無我道 原動力 帰り行く

【マタイ5】

13 汝らは地の塩なり、塩もし効力を失わば、何をもてか之に塩すべき。後
 は用なし、外にすてられて人に踏まるるのみ。14 汝らは世の光なり。山の上
 にある町は隠るることなし。15 また人は灯火をともしびともしびとして升ますの下におかず、灯
 台の上におく。かくてともしびは家にあるすべての物を照らすなり。16 斯か
 のごとく汝らの光を人の前にかがやかせ。これ人の汝らが善よき行為おこないを見て、
 天にいます汝らの父を崇あがめんため為ためなり。

●救う義

13 汝らは地の塩なり、塩もし効力を失わば、何をもてか之に塩すべき。後
 は用なし、外にすてられて人に踏まるるのみ。

塩と砂糖がないと——醬油もありますけれども——我々の食べ物調味ができないわけ
 です。「地の塩」という時に、これは福音の世界でいうと、義です。福音の世界は義と愛です。
 「神の義は福音のうちに現れ……」(ローマ1・17)

とローマ書に書いてあるとおり。キリストだけが義人です。

「義人なし、一人だになし」(ロマ3・20)

とパウロが言っているのはそのことです。「地の塩」というのは、福音的にいうと義の世界
 です。神の義には救いの義と審きの義がある。同じ義が審判さばきになったり、救いになったり
 する。そのことは旧約に既に出ている。イザヤ書45章8節、

「天ようえより滴したたらすべし。雲よ義をふらすべし。地はひらけて救すくを生うじ、

義をもともに萌もえいだすべし。われエホバ之を創造せり。」(イザヤ45・8)

ここに「義」という字と「救」という字が出ています。これが同義語に使ってある。義と
 救いが対句になっている。義が即ち救いです。キリストの義は審く義でなくて、救う義で
 あります。



● 義をたまわる

創世記15章6節に

「アブラハム、エホバを信ず。エホバこれを義となしたまえり。」(創世記15・6)
とある。

「信仰によって義とされる」

と、プロテスタント神学ではよく言います。

「義とする」

というよりも、

「義を与える」

ということです。我々はキリストの義をたまわるんです。

「信仰義認」

というのは観念的な言い方です。プロテスタントでは

「信仰によって義とされる」

といつも言っている。観念的ですね。マルチン・ルターが、

「クリスチャンは罪びとにして義人である」

と言った。その通りです。生来の我々は罪びとです。自己中心を「罪びと」という。エゴイストということ。けれども、キリストの贖罪しよぐざいを受けて、罪の贖いあがなを受けて、根底においてはもう罪無き世界、無の世界、無罪の世界です。そこには義がくる。義の内容は聖霊です。だから、義と愛とは離すことができない。義であることは、同時にそれはまた愛である。

「義」

というのは、キリストが神さまの御意みこころを完全に行ずる世界が義なんです。

「義人」

というのは、聖意を、神意を体現しているのが義人なんです。これはキリストの他には誰もできない。

「御意を行なう者だけが天国に入れる」

というキリストの言がある。「行なう」とは体現すること、ただ「行為」ではない。身体からだで現する、全存在で現することです。「体からだ」というのは全存在という意味です。ただ「からだ」という意味ではない。全存在をもつて現する。一般のプロテスタントの信仰はここまでできない。聖霊がきてないからです。それは聖霊がきていなければできない。

イザヤ書45章14～15節、

「14 エホバ如此かくいいいたもう。エジプトがはたらきて得しものとエテオピアがあるきないで得しものとはなんじの有もとならん。また身のたけ高きセバ人きたりくだりて汝にしたがい繩につながれて降り、なんじのまえに伏しなんじに祈りていわん。まことに神はなんじの中にいませり、このほかに神なし一人も



なしと。15救をほどこし給うイスラエルの神よ、まことに汝はかくれていま
す神なり。」(イザヤ45・14、15)

すごいね、我々のうちに「隠れています神」だという。

「隠れています神に祈れ」

とキリストが言っておられる。

とにかく聖書というのは凄い。そういう現実でものを言っているから。絶対に頭で書かれた書ではない。だから、聖書は読み入ること、読んでその中に入らなければダメなんです。意味ではない。聖書はドラマチックな現実ですから、その中に自分を入れる。

●聖意体现

聖意体现が義です。聖意体现すると、これは縦の関係だから、そうすると、今度は横に働く。これが愛なんです。隣人を愛する。「愛する」とは助けること。

「人助けをする」

ことを「愛する」という。愛するとはいろいろな内容です。とにかく、人を助けなければダメです。福音の世界に入れてあげなくてはダメ。だから、福音の世界は言葉の世界ではない。全部、行為の世界なんです。今までで皆さん私は、

「信仰、信仰。行為は問題ではない」

と言われてきた。ところが、「しんこう」の「こう」の字は「仰ぐ」ではダメなんだ。「信行」でなければ。信即行でなければダメです。

「御意を行なう者だけが天国に入れる」

という、「行なう」という言葉はむしろ「体现」と言う方がよい。キリストの聖意を体现するためには、キリストの中に自分を入れなければダメです。それが

「エン・クリスト」

です。これは瞑想しなければダメ。瞑想することと祈ることが一つのような世界です。キリストの懐の中に入ってしまう。キリストは神の懐の中にいたひとだ。ヨハネ伝に書いてある。

「未だ神を見し者なし、ただ父の懐裡ふところにいます独子ひとりごの神のみ之あつわを顕し給えり」

(ヨハネ1・18)

と。我々はキリストの懐の中に入ってしまう。それはみな霊的な現実を言っているんです。十字架で門が開かれている。キリストは、

「我は門なり」

だから、十字架で開かれている門、十字架の門を通って行けば入れる。

「我は十字架の門なり」

ということ。



●その中に自分が入る

こういうことを私は話しながら、その中に自分が入るから、異言が爆発しそうになる。頭であなた方に説明しているのではない。告白しているんだから。あなた方もそのつもりで聴いていなければダメです。意味なんか考えていたらダメです。現実に私と一緒に入っていく。それが本当の現実です。だから、私は

「信仰、信仰なんて言うな。現の世界だ」

と言っている。信、現なんだ。現実なんだ。

「信」という字は「人偏に言」と書く。人が神の言に成っているのはキリストだけです。

「言は神と共にあり。言は神なりき」(ヨハネ1:1)

というのはキリストのことです。そして、あのヨハネ伝1章に「光」と書いてある。それは「世の光」である。

●世の光

14 汝らは世の光なり。山の上にある町は隠るることなし。

とある。イザヤ書60章に、

「起よ、光を發て。なんじの光きたり、エホバの栄光なんじのうえに照り出た

ればなり。」(イザヤ60・1)

とある。「エホバ」の代わりに「キリスト」と言えばいい。

「起きよ、光を發て。なんじの光きたり、キリストの栄光なんじのうえに照り

出たればなり」

と、「キリスト」に置き換える。

「2 視よ、くらきは地をおおい、闇はもろもろの民をおおわん。されどなんじのうえにはエホバ(キリスト)照り出たまいて、その栄光なんじのうえに顕わ

るべし。3 もろもろの国はなんじの光にゆき、もろもろの王はてり出るなん

じが光輝にゆかん。」(イザヤ60・2～3)

とある。もつと凄いいことが書いてある。

「19 昼は日ふたたびなんじの光とならず、月も輝きてなんじを照らさず、エホバ永遠になんじの光となり、なんじの神はなんじの榮となり給わん。20 なんじの日はふたたび落す、なんじの月はかくることなかるべし。そはエホバ永遠になんじの光となり、汝のかなしみの日畢るべければなり。21 汝の民はこ

とごとく義者となりて、とこしえに地を嗣がん。かれはわが植えたる樹株、わが手の工わが栄光をあらわす者となるべし。」(イザヤ60・19～21)

凄いいね、まったく。イザヤ書61章の始めの方も凄いい。これと連関するようなことが書いてある。



「主エホバの靈われに臨めり。こはエホバわれに膏をそそぎて貧しきものに福音をのべ伝うることをゆだね、我をつかわして心の傷める者をいやし、¹ 俘囚にゆるしをつけ、縛められたるものに解放をつけ、² エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告げしめ、又すべて哀むものをなぐさめ、³ 灰にかえ冠をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ、悲哀にかえ歡喜のあぶらを予え、うれしいの心にかえて讚美の衣をあたえしめたもうなり。かれらは義の樹エホバの植えたもう者、その栄光をあらわす者となえられん。」
(イザヤ61・1～3)

「膏をそそぐ」というのは聖靈を注ぐことの象徴的な言い方です。サムエルがサウロに膏を注いだ。あれもそうなんです。イザヤ書の60章、49章6節、42章6節にみな「光」のことが書いてある。

「汝らは世の光なり」という。これはヨハネ伝の8章にもある。

「¹² 斯てイエスマた人々に語りて言い給う『われは世の光なり、我に従う者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし』」(ヨハネ8・12)

世の光、生命の光と言う。我々がこうやって生きているのは、太陽の光熱でもって生きている。よろずのものは、動物も植物も皆この太陽の光で生きている。光には熱がある。熱は、別な言葉でいうと、愛です。光は生命を与えるもの。生命を与えるということが愛です。

マタイ伝5章にもどります。

¹⁵ また人は灯火をともして升の下におかず、灯台の上におく。かくてともしびは家にあるすべての物を照らすなり。

この「灯台」は家の中の灯台のことだ。けれども、我々は今度は、いわゆる灯台のことも連想して然るべきです。嵐の中でもし灯台がなかったら、船はみな難破してしまふ。

灯台守の娘さんの話がある。北アメリカ州のニューイングランドの海上の2マイルばかり離れた所にある離れ小島の灯台にアイダという名前の12、13歳の少女がいた。お父さんが買物に行ってしまった。海が荒れてきたので、お父さんは帰ろうにもなかなか帰れない。灯台の光を灯すことを、その女の子は見てたけれども、なかなか手が届かない。灯台の中にある本を一生懸命で積み重ねて、その上に乗って、やっと光を灯したので、お父さんがびっくりした、なぜ子どもがそんなことができたのだろうか。それで嵐の中で難破しないですんだという。実際の話です。

我々はそういう

「灯火であれ、灯台であれ」

ということですよ。闇を照らして、人を救い助けるから。「善き行為」とはそのことです。



●無我道

16 斯くのごとく汝らの光を人の前にかがやかせ。

「愛の光」とは、いうまでもなく、聖霊です。聖霊というのは非常に豊かな内容を持ったものです。「聖霊」という言葉を聞いて、その豊かな内容を自然に持たないかね。我々の知情意の世界を聖霊は自由に行使することができる。豊かな働きをする。キリストは聖霊の権化です。我々の受ける聖霊は十字架が土台です。贖罪の十字架で元来の私がつ、飛ばされる。エゴなる私がつ飛ばされるところ、そこが無の世界だ。十字架は我々に無の世界をくださる、私無き、無我の世界を。まさにこれは無我道です。そうすると、そこには聖霊がくる。十字架の土台に聖霊がくる。十字架と聖霊は絶対に切り離してはいかん。これを切り離すと、これが悪霊に変わる。サタンがやつてくる。サタンは狙うからね。

これ人の汝らが善き行為を見て、天にいます汝らの父を崇めん為なり。

これはキリストの言です。我々の人生の目的は神讚美です。主を崇めること。アッシジのフランチェスコの『太陽の歌』というのは本当に神讚美の素晴らしい歌です。詩篇の148篇と相通する。148篇、149篇、150篇は神讚美の詩篇です。生活そのものが神讚美ということ。「詩篇（テヒリム）」というのは本当は「詩篇」ではない。「讚美歌集」なんです。「詩篇」という訳はおかしい。旧約の讚美歌集です。始めは悩みの言葉があっても、終りになると神を讚美している。

しかし、詩篇ではまだひとつ足りない。愛の念が歌われているところが詩篇にはほとんどない。神さまへのお願いと讚美、これが詩篇です。これが旧約のある意味での限界だ。

いわゆるプロテスタント信仰に対して、我々の信仰は「信行」です。それが本当の信の世界です。カトリックとプロテスタントを総合したような信行、一如の世界、これが本当の福音だ。

真理というものは二段構えはダメなんです。全部、一如の世界です。渾然一如。どんなにその姿が惨めでもいい。二段構えでなくて、一如のそういう在り方です。

「我と父とは一つなり」（ヨハネ10・30）

とキリストは言ったでしょ。これは聖書の句の中で一番短い句で、たった三字です。父子一如です。

「主と我は一つなり」

ということ。私たちは

「キリストと一つ」

です。それが私たちの根源現実、根源の現実です。相対的な現実はなかなかそういかないけれども、根源の現実はそうなんだ。そして、それがしばしば相対現実の中にも入ってくる。その時は強いよ、何ものも恐れない。主我一如です。それは完全に贖われているから、過去も現在も未来も。キリストの贖いは無条件なんだ。我々は無条件に贖われている。よく



「潔めたまえ」

とか、

「何々したまえ」

という祈りがあるけれども、実は全部それが現在完了なんです。既に賜たまわっている。十字架と聖霊を受けていれば、全部それは現実なんです。

「これからどうしよう」

ではない。

時々深く瞑想してくださいよ、そういう根源現実を。瞑想して祈り入ることは大事なことです。時間を超越してしまう。何分だか何時間だかわからない。そうすると、もう霊に満ちてしまつて、身体が熱くなる。熱くなってヘタすると異言が飛びだしそうになる。

●原動力

「ターゲット イスト アツレス」

これはゲーテの『ファウスト』の第二部に出てくる言葉です。あの言葉の豊かなゲーテが、「行為が一切である」

と言う。行為に裏付けられていない言葉は空しい。倫理学を講ずる教授は絶対に行為の裏付けがなければダメです。哲学的倫理的な努力ではくたびれてしまう、聖霊の力でそれがいかないと。

「自分は救われているから、いよいよもって追求するんだ」

という言葉がパウロの書翰の中にある。そういうことなんです。救われているから、いよいよ追求する。そういう努力はいわゆる努力とは違う。これには原動力があるから。いわゆる努力精進はくたびれる。

「³⁰年少きものもつかれてうみ、³¹壯なるものも衰えおとろう。³¹然はあれどもエホバを^{まぢのぞ}俟望むものは^{あらた}新なる力をえん。また鷲のごとく翼をはりてのぼらん。走れどもつかれず、歩めども^{うま}倦ざるべし。」(イザヤ40・30～31)

という。この

「エホバを待ち望む」

という言葉。「待ち望む」というと何か

「待つて望む」

ように思うけれども、

「信頼する」

ということ。或いは

「帰り行く」

ということ。エホバに帰り行く者は、キリストのところに帰り行く者は力を得て疲れ



ない。キリストのもとに祈り入り、祈り行く。キリストの中に祈り、祈り入る。これは聖霊の世界です。それは聖霊がくるから。

私が集会をした後で、よく

「お疲れさま」

と言う人がある。冗談言っではいかん。私は集会をすると逆に力が来ているんだから、「お疲れさま」どころでない。集会の後には聖霊の力で、始めよりか後の方が力が来ている。

「集会の後でくたびれました」

なんていうのは人間的な力でやっているから、そんなことになる。聞くも語るも同じこと、全部、力が入ってくる。我々の集会はそういう集会です。もし、あなた方が「聞き疲れた」と言ったら、それは聴き方が悪い。

「聴いていて力が来てしょうがない、語っていて力が来てしょうがない」

と。それが本当の福音の世界です。使徒たちの信行の現実はそうだった。聖霊に満ちているから、牢屋に入ったって鎖が解けてしまったりする。使徒行伝を見てたら大変でしょ、大変な現実ですから。ピリポなんていうのはエジプトの閹人に語った後でどこかヘスツと飛んで行ってしまった。

● 帰り行く

ヨエル書2章12節、

「¹²然れどエホバ言いたもう。今にても汝ら断食と哭泣と悲哀とをなし心をつくして我に帰れ。¹³汝ら衣を裂かずして心を裂き汝等の神エホバに帰るべし。

彼は恩恵あり憐憫あり、かつ怒ることゆるく、愛憐大にして災害をなすを

悔いたもうなり。¹⁴誰か彼(神)のあるいは立帰りて悔いて祝福をその後にと

めのこし、汝らをして素祭と灌祭とをなんじらの神エホバにささげしめたま

わじと知らんや。」(ヨエル2・12～14)

「神さまでも時々立ち帰って悔いる」

なんて、「面白」ことが書いてある。とにかく、

「心をつくして我に帰れ」

ということ。「心をつくして」というヘブライ語は

「すべての心」

という言い方をしている。

「帰り行く」

ということが一番大事なことです。「悔改」という言葉よりも「帰り行く」ということ。ヘブライ語で「シューブ(立ち帰る)」という字は帰ることも行くことも同じ字なんです。

「²⁸その後われわが霊を一切の人に注がん。汝らの男子女子は預言せん。汝ら



の老いたる人は夢を見、汝らの少き人は異象を見ん。29 その日我またわが霊を奴婢に注がん。」(ヨエル2・28、29)

聖霊の預言がこれなんです。キリストに帰りに行くことが本当の前進だという。そして、一如の世界です。一如の世界だから、ペテロが生まれつきの跛者に、

「我を見よ!」

と言った。「我を見よ」というのは、

「我がうちなるキリストを見よ」

ということですよ。

「わが内なるものによりて、歩め!」

と言ったら、生まれつきの跛者が立ち上がってしまった。凄いね、そういう聖霊の力の現実です。

キリストは

「わが言は靈なり、生命なり、力なり」

と仰った。そういうことは、我々一人ひとりが体現していかなければ、本当の信とはいえない。だから、「しんこう」の「こう」の字は、私は交わると書く。「信交」です。そうすると、これは「信行」になる。

「地の塩、世の光」という義であり、愛の光です。

「12 われ既に取れり、既に全うせられたりと言うにあらず、唯これを捉えんとて追い求む。キリストは之を得させんとて我を捉えたまえり。13 兄弟よ、われは既に捉えたりと思わず、唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向かいて励み、14 標準を指して進み、神のキリスト・イエスに在りて上に召したもう召しにかかわる褒美を得んとて之を追い求む。」(ピリピ3・12)

14

「キリストは捉えてくださったから、私はいよいよ追求する」

ということですよ。仏教の世界で言うところ、「本願」の力です。本願の劫力です。

「木喰の袈裟や衣は破れてもまだ本願は破れざりけり」

という木喰の句がある。

「仏法は善きも悪しきも隔てなしわが本願に漏らすものなし」

相対的な善悪ではない。本願は一切を救ってしまう。福音の世界と同じことです。

「自分の信仰がどうかこうだ」

なんて、そんなことを考える必要はひとつもない。こちら側は空っぽで、受けとるばかりです。体受現だ。身体で受けとって、身体で現る。体受現の世界、これが本当の福音の世界です。体受だけではダメ。体受したら体現せざるを得ない。そういうことです。

